

# 福祉のひろば

11

2012



特集

## 原発事故後の福島での生活と福祉 第18回社会福祉研究交流会in福島

あきらめないことにしたの／作物をつくってこそ農家／被害をよく見てこれからの考えてほしい／障がい者の被災現場から／まだ語りはじめていない／フクシマからふくしまへ／分断される県民／南相馬市生活保護打ち切り問題／人の復興、心の復興／福島の現状と復興に向けた課題



ひろばトーク

にしおか

おさむ

白十字ホームホーム長

西岡

修さん

とにかく手にとって、読んでほしい9月号

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の  
立場に立って設計しています。  
お気軽にご相談下さい。

## 京都建築事務所

〒 604-8083  
京都市中京区三条柳馬場東入中之町10  
代表取締役社長 川下 晃正  
TEL (075) 211-7277  
FAX (075) 211-7270  
<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

〒601-8382

京都市南区吉祥院石原上川原町21  
<http://www.creates-k.co.jp>

クリエイツかもかわ



TEL 075 (661) 5741  
FAX 075 (693) 6605  
価格税込・送料何冊でも240円



森山千賀子・安達智則◆編著

定価2310円

特別な人が介護を要するのではなく、  
誰もが介護に関わる時代はすぐそこに  
地域に根ざした豊富な事例と深い理  
論的考察、先駆的な取り組みに学びな  
がら、「介護の質」が保障された地域社  
会を展望する。

# 介護の質

## 「2050年問題への挑戦」 高齢化率40%時代を豊かに生きるために



「京都市式認知症ケアを考えるつどい」実行委員会◆編著

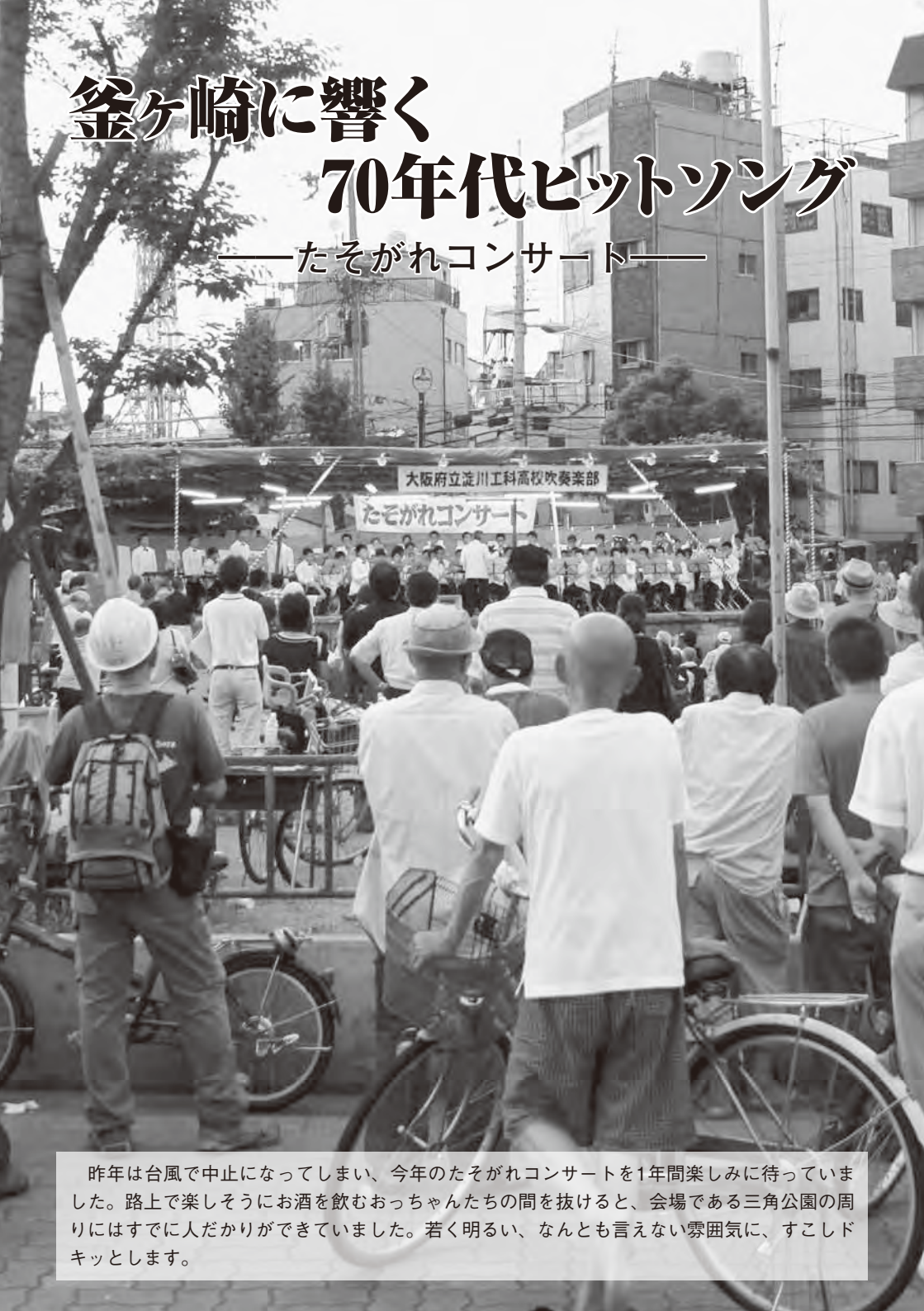
生活の連続性を断ち、生活を根こそぎ  
にする形で始まる医療やケアとの出  
会いはお互いの不幸である。出合いの  
ポイントを前に倒す。認知症医療・  
ケアの現在と道筋をデッサンし、認知  
症を生きる人から見た地域包括ケア  
を言語化する試み。 定価1890円

# 認知症を生きる人たちから見た 地域包括ケア

## 京都市式認知症ケアを考えるつどいと 2012京都文書

# 釜ヶ崎に響く 70年代ヒットソング

——たそがれコンサート——



昨年は台風で中止になってしまい、今年のたそがれコンサートを1年間楽しみに待っていました。路上で楽しそうにお酒を飲むおっちゃんたちの間を抜けると、会場である三角公園の周りにはすでに人だかりができていました。若く明るい、なんとも言えない雰囲気、すこしドキッとします。



70年代のヒットメドレーに、ノリノリで「がんばれー！」と声援をとばすおっちゃんもいましたが、どちらかというと、じっと聴いているおっちゃんが多いのです。少し意外だなと思ったけれど、ビール片手に、静かに、でも穏やかな表情で演奏を聴くおっちゃんたちを見ていると、みんないろいろなことを思いながら聴いていることがわかります。



20代の私も知らない曲が多かったので、演奏している高校生たちにはもっと馴染みの薄い曲ばかりだと思います。それでも、「コンクールより、たそがれコンサートに出たい」という生徒さんがいるそうで、驚きです。たそがれコンサートの何が魅力なのか、ぜひ生徒さんにも聞いてみたいと思いました。



1981年から始まったたそがれコンサートは、全国大会で24回も金賞に輝く大阪府立淀川工  
科高校吹奏楽部が演奏するようになって今年で22回目。有名な顧問の丸谷明夫先生は、「この  
コンサートだけはできる限りずっと続けたい」と話されます。先生や高校生をこんなにも惹き  
つける釜ヶ崎の魅力をもっと多くの人に知ってほしいです。(写真：下野祇園 文：申佳弥)

●特集● 原発事故後の福島での生活と福祉  
—第18回社会福祉研究交流集会 in 福島—

[報告] 原発被害と暮らし・福祉—南相馬、飯館  
渡邊とみ子・澤田忠徳・西みよ子 11

[講演] 福島の実状と復興に向けた課題 丹波史紀 20

[リレートーク] 原発被害と暮らし・福祉  
中村雅彦・鈴木庸裕・松崎暁世 26

報道されない福島県民の苦難  
鈴木隆夫・倉持 恵・天野和彦・北村育美 38

●連載●

フォーラム  
この夏の宿題 相野谷 安孝 46

ひとつのこと—社会福祉労働と私たちの実践  
認め合える関係をめざして 高鷲保育園 48

連載 小川政亮 第二部 自伝(8)  
沖縄へ、そして社会保障裁判とかかわりつつ 小川 政亮 50

相談室の窓から  
頑張りすぎないで(2) 青木 道忠 54

わらじ医者 早川一光の「よろず診療所日誌」  
不思議、ふしぎ、人間のつくり(その11) 早川 一光 56

よりあって おりあって—宅老所よりあい物語—  
「はじめまして」からはじまる 下村恵美子 58

育つ風景 ルールって? 清水 玲子 60

穂波のアメリカ子育て事情  
マサチューセッツ州のメディケイド 吉田 穂波 62

映画案内 『終の信託』 吉村 英夫 64

現代の貧困を訪ねて  
反貧困全国キャラバン2012 生田 武志 66

施設訪問ボランティア  
心と心、地域をつなぐ お助けマンちむちむ 68

私の研究ノート  
在宅介護する家族と地域とのつながり  
—小規模多機能ホームの実践から— 内藤 智子 70

ホームレスから日本を見れば ありむら潜 72

花咲け! 男やもめ 川口モトコ 74

●表紙の絵と写真●  
絵=神門やす子  
写真=下野祇園



●カット●  
川本 浩

みんなのポスト 44 / 今月の本棚 73 /  
しりとりであそぼう! & 憲法クイズ 75 / 福祉の動き 76

●グラビア● 釜ヶ崎に響く70年代ヒットソング  
—たそがれコンサート—

とにかく手にとって、  
読んでほしい9月号

社会福祉法人白十字会

特別養護老人ホーム 白十字ホーム ホーム長

にしおか  
西岡おさむ  
修さん

福祉の仕事は、本来個性が高く、一人ひとりの歴史や文化に基づいた価値観が大切なわけですが、歴史とか文化といっても一筋縄ではいきません。とりわけ若い世代の職員は、お年寄りと五〇年も六〇年もの世代差があり、実際はむずかしいところですよ。

福祉の職場、たとえば特別養護老人ホーム（特養）では三〇歳、四〇歳、五〇歳……、そしてお年寄りたちによって若い人は支えられ、人と人との関係について経験を積み、学んでいくながら一人前になるのだと考えています。

しかし現実には、若い人が使い捨てられ、年長者は切り捨てられる中で、そういった世代が支え合うような関係がとくられず、困難に直面した若い人たちは、自信や信頼を失ったまま、黙って仕事の場から消えていってしまうことが少なくありません。

八月末、総合社会福祉研究所・福島大学災害復興研究所主催で福島で開催された第一八回社会福祉研究交流集会に参加したところ、一日目のプログラムの終わり頃に「福祉のひろば」九月号（月刊化一五〇号記念）の宣伝がありました。

昨年研究所に入職した職員の方と福祉施設や事業所で働いている若い世代一七人が、企画し取材し編集した特集号と聞いて、大いに関心を持ちました。

自分たちのまとめた原稿が活字や写真となって印刷製本された「福祉のひろば」九月号を、作り手の人たちはどんな気持ちで手に取られたのでしょうか。私は、サッと一読したあと、そのことを感じました。

二月から七月にかけて九月号ができていくまでを追った記事は、写真を追っていくだけでも、若い人たちだけでなく、周囲が温かくも厳しく見守っているように感じました。若い人たちが活躍できる環境づくりが大切なことが、誌面を通じて伝わりました。「失敗し



## 職員の方の感想は……

なにせ感動したのが、「いきいき職場6か条」です。私はこの「いきいき6か条」を職員室の壁に大きく拡大して貼り付けました。

特に2番目の「必要とされ、誇りを持てる職場」には思い出されることがありました。10年ぐらいい前になりますが、迷える若い職員に私も困惑しつつ、贈った言葉が“自分の仕事に愛情を持ち、誇りを持つこと”です。

そんな仕事、そんな職場にしよう！ したい！ 今も変わらない思いです。今日もこの職員室の6か条を読み、仕事に入ります。

追伸。“6か条Tシャツ”をつくりませんか！

白十字ホーム 生活福祉課課長 松下かほる

たつていいじゃない!!」のメッセージが生きています。

取材チームによる「いきいき若者インタビュー」は、「いきいき職場六か条」にちよつとヒヤツとしましたが、いのこの里の調理師さんたちの思いを読んで大いに感激しました。特養の基準では、調理業務は入所者の処遇に直接影響を及ぼさない業務とされ、第三者への委託が認められ、あたりまえになっています。堂々と胸を張って「特養の調理師だ」と言える自信は、特養にとつて調理は「直接影響」のある業務であるからこそ、と強く思いました。

老人ホームで働いていると、「老人」以外の領域への関心が薄くなる傾向があります。それだけに、クラウンの仕事、保育や障害者の事業所、とりわけ昨年三月の震災や原発事故によって、一年半が過ぎた今も不透明で先の見えない状況にある中でもその地域で取り組んでいる職員の方たちへのインタビューは、その思いに心が揺さぶられました。こういう企画だからこそ、取材をしたみなさんにとつても、きつと新しい力を得ることができたのではないのでしょうか。

九月号を読ませていただいて、自分が勤務している施設の職員たちにもぜひ読んでほしいと強く思いました。基本的には自分で購入して読んでほしいと思うのですが、これがなかなかむずかしい。「毎日のメールのやりとりをちよつと減らせば？」と言つたら、「携帯の料金は定額制だ」とのこと。そんなことは兎も角も、とりあえず手にとつて、ページをめくつて読んでみてほしいと思います。購入の連絡を差し上げた次第です。



# 自分のまちに福島第一原発があったら 特集 〆原発事故後の福島での生活と福祉〆

— 第一八回社会福祉研究交流集会in福島（八月二五～二六日開催） —

私の住むまちの役所を軸に、避難指示の三キロ、一〇キロ、二〇キロ、三〇キロ半径の円を描く。そして、地震と津波と原発事故が襲いかかった福島のわずかな情報と見聞で想像し、その中で生き続けている福島の人たちの願いや思いを重ね合わせる。今回の社会福祉研究交流集会では、現地だからこそ聞ける大切なメッセージを伺った。

東京電力福島第一原子力発電所（以下、第一原発）は、東北の福島県大熊町と双葉町にまたがる東京ドーム七五個分、三五〇万平方メートルの敷地の海側に六基の原発が並ぶ。アイゼンハワー米大統領が、一九五三年に国連で原子力の平和利用演説を行い、原発導入先にあげられた国土の狭い日本は、広島、長崎の原爆に続き、五四年三月一日のビキニ事件にもかかわらず、原子力の「平和」利用と「安全」、そして利権の原子カムラの構築で原発建設を強行してきた。第一原発一号機は、七一年に営業運転開始、七九年の六号機まで順次稼働。つくられた電気はすべて関東に送られる。

二〇一一年三月十一日、第一原発敷地内で、協力会社の作業員五六六〇人、東電社員七五五人の計六四一五人が働いていた。一四時四六分、震度六強の地震。福島第一・第二原発は自動停止し、大津波により、第一原発は全交